

## 文 献 紹 介

### 71-47 タイム・シェアリング・システムの 試み

Caxton C. Foster: An Unclever Time-Sharing System [COMPUTING SURVEYS, Vol. 3, No. 1, March 1971, pp. 23~48] (The Survey and Tutorial Journal of the ACM) key: time sharing, operating system, tutorial, command language, scheduling

Massachusetts 大学で開発され、すでに当大学で実用化されている UMASS-II (Unlimited Machine Access from Scattered Sites-II) と称する TSS の概略が示されている。最初の完成が 1967 年であり、かなり時代的制約を受けているが、TSS で必要とされる機能を一通り有し、コマンド処理も含め多数のアイデアが折り込まれている。今日、特にミニコンピュータを利用して TSS をデザインするうえで、よき基本例であり、非常に有意義な論文である。

UMASS-II は、センターに CDC 3600 を用い、端末にモデル 33 テレタイプを用いている。これらの端末は最大 64 台まで可能であり、PDP-8 を介して 3600 と結ばれている。また、3600 は 2 台設置され、マシン・ダウン時の切り換えに備えている。

PDP-8 と 3600 の関係は、次のようになる。

PDP-8 では、各端末からの入力を、ビットからキャラクタに変換し、全端末用に設けた 64 キャラクタからなるブロックの該当箇所へ挿入し、0.1 秒ごとに 3600 に割り込みをかける。したがって、3600 側ではバッファを設け、各端末からの入力に対し 0.1 秒ごとに最大 1 文字ずつため込む方法をとる。一方、3600 側から出力する際には、ちょうど逆の方法がとられる。

なお、このように PDP-8 と 3600 とが定間隔で通信を行なうため、互いの側から相手をチェックし、異常事態の発見に努めている。

UMASS-II では、64K の主記憶を 4 ブロックに等分し、それぞれを PAGE と称する。PAGE 0 をシステムが使用し、PAGE 1~3 を各ユーザ・プログラムに割り振り、1 カンタム中その PAGE を占有させる。したがって、16K 以上のユーザ・プログラムは UMASS-II では処理できない。また、使用するストレージとして、2 レベル設け、ソース・プログラムを保存

するパーマナント・ストレージとしてディスクがあり、ワーク・スペースやロール・アウトの内容を保存するテンポラリー・ストレージとしてドラムがある。実際の処理は、ディスク上のワーク・スペースで行なわれる。ディスク上に保存した内容には、さらにプライベートなもの、パブリックなものがある。なお、ドラムやディスクはいずれもある一定ワードずつの最小単位に区分して使用される。

UMASS-II では、各端末にいくつかのモード (OFF, INPUT, BUSY, OUTPUT) を設定し、これらの切り換えは、COMMUNICATOR が管理する。

端末からの入力は、コマンドとセンテンスに区分され、後者は必ずシーケンス番号を伴い、システム内ではストリングとしてワーク・スペースにためられる。一方、コマンドは、各種の機能に応じ、複数存在する (図 1 を参照)。上述したモードとの対応づけは次のようになる。まず、OFF モードからセンテンスが入力されて INPUT モードに移行する。各センテンスの入力はそのまま INPUT モードで行なわれるが、コマンドが入力されると BUSY モードになる。特に RUN コマンドの場合には、ユーザ・プログラムが実行されるが、各カンタムごとに実行が中断された時点で一時 OUTPUT モードに移行し端末への出力を行なう。

ここで、コマンド処理の概略は次のようになる。

まず、各コマンドに対応してコマンド・シーケンスが存在し、コマンド処理をするうえでの一連の仕事 (これをセグメントと称する) を示す。一方、システム内の各セグメントに対しては、何らかのキューがあり、処理待ちにあるコマンドに関係する端末番号が記録されている。ここで、あるコマンドを処理する場合、そ

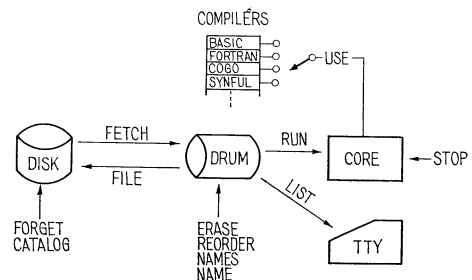


図 1 コマンド例

のシーケンス上の1セグメントの処理が終了すると、ADVANCE が働き、次に処理すべきセグメントのキューにその端末番号を登録し、かつ、その次に処理が必要なセグメントにポインタを合わせていく。同時に処理すべき他のコマンドに対しても、同様の操作を行なう。実際のスケジュールは FINDNEXT によって行なわれ、すべてのセグメントを常にある順番でサーチし、処理待ちのキューがあれば、そのセグメントを選択する。ただし、そのリソース状況から処理が後にまわされる場合もある。このように UMSS-II では、セグメントを中心にスケジュールを行なっている。なお、各端末に対する一連のセグメントを処理するとき、仕事の指示情報を保存するベクトルとして、FACT が用意されており、一種の制御ブロックとなっている。(仲沢 洋子)

### 71-48 走査形表示装置を用いた図形表示

A. Michael Noll: Scanned-Display Computer Graphics. [C'ACM, Vol. 14, No. 3, March 1971, pp. 143~150] key: computer graphics, scanned-display, scan conversion, raster displays

本論文では、走査形表示装置を電子計算機の図形表示端末として利用する場合に生じる走査形表示装置特有の問題点とその解決法について述べている。

走査形表示装置は、picturephone に代表されるように、1画面分の情報を電子計算機で記憶しておき、順次、情報を走査形表示装置により取り出し、画面に表示するようにすれば、図形表示端末として十分利用できる。そこで picturephone に情報(図形)を表示するシステム構成を図1に示す。ここで問題となる事項とその解決法は、次のとおりである。

#### (1) 情報の変換方法

電子計算機が図形情報を扱う場合、一般に  $x, y$  座標を用いて行なうのに対し、走査形表示装置の情報の

記憶は、画面のドットに対応したメモリ上の語とビットで行なう。そこで、 $(x, y)$  を語とビットに変換する必要がある。その変換方法を次に示す。

(a) analog hardware による方法  $(x, y)$  のまま表示が行なえる一般の CRT ディスプレイ装置を中間出力装置として用い、それをイメージオルシコンで走査して、目的の映像信号を得る方法である。本方法は信頼性、価格の点で問題がある。

(b) soft ware による方法 2対1の飛び越し走査方式では、 $(x, y)$  座標を語とビットに変換するアルゴリズムは、各フィールドの先頭を基準とし、1走査線を240に量子化すれば、

$$\frac{y \text{ 座標} \times 240 + x \text{ 座標}}{2}$$

(1語を構成するビット数)

であって、商を先頭からの語数、あまりをビット数として得ることができる。

本方法は、論理回路の信頼性とプログラムの汎用性から期待できる方法である。ただ、本方法は $(x, y)$ の各点について計算が必要であるので、画面の一部を変更するときはよいが、全画面を変えるときは時間がかかりすぎるので実用的でない。

#### (2) 走査形表示装置のための記憶媒体

(a) 内部記憶装置(コアメモリ) 記憶容量が十分あるときは最もよい。現在、まだ価格の点で問題があるが、将来、低価格化・小形化が期待できるので有望な方法である。

#### (b) separate addressable digital core storage

画面の一部の変更には向くが、全画面をたびたび変えるようなときは適さない。将来は(a)の方向に向かうことが予想される。

(c) ドラム, ディスク データを変更する際、目的とする位置がヘッドの真下にくるまで待つ必要があるため、ソフトが複雑になりやすい。また、複雑な機械部分が多いため高価格であり、保守に問題がある。

#### (3) その他

図形の移動による問題点とその解決法、記憶情報変換のための言語についても述べている。

本論文は、表示に関する部分の種々の問題点とその解決法が述べられているが、今後、走査形図表示装置に合った図形処理の成果が期待できよう。(星野 肇夫)

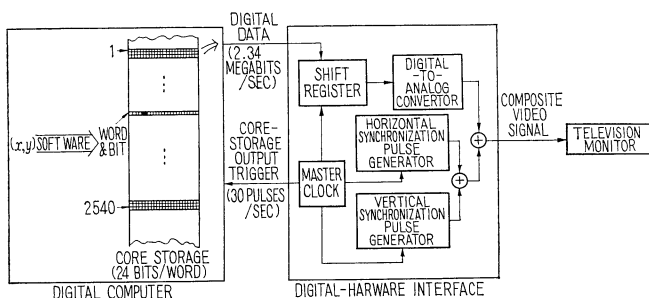


図 1

---



---

 ニ ュ ー ス
 

---



---

**第8回「鉄道におけるサイバネティクス利用  
国内シンポジウム」開催さる**

第8回目の「鉄道におけるサイバネティクス利用」の国内シンポジウムは、去る9月28日から3日間にわたって、国鉄本社と鉄道技術研究所において開催された。「鉄道におけるサイバネティクス利用」の国際シンポジウムは、およそ3年に1回の割合で、すでに3回開催されている（第3回の国際シンポジウムは東京で一昨年4月に行なわれ、すぐれた日本の鉄道技術は海外の鉄道人から注目された）。1963年にパリで第1回が行なわれたときから、日本では年1回の割合で国内シンポジウムを実施し、今回で第8回目となったものである。このシンポジウムは、ウィナーに始まるサイバネティクスの考え方を鉄道の場に利用しようというもので、鉄道の各種業務および組織にコンピュータやその他のエレクトロニクス機器などを導入し、組織各部の互いの調和と最適な運営を目指すものである。今回提出された論文は100件にも達し、年々増加の一途をたどっている。これらの論文は、経済評価、旅客輸送、貨物輸送、運転、鉄道における情報処理、道路交通などの分野にわたって鉄道内およびメーカーなどから寄せられたものである。それらの中にはコンピュータを利用した各種のシステム、たとえば、グラフィック・ディスプレイを用いたコマトラック、列車ダイヤ作成、列車制御、各種シミュレーション、自動設計など多くの実例が報告されている（これらの論文は、日本鉄道サイバネティクス協議会発行の論文集に掲載されている）。

**第5回 IBM コンピュータ・サイエンス・シ  
ンポジウム**

日本IBMが主催する第5回IBMコンピュータ・サイエンス・シンポジウムは、“イメージ・プロセッシング”をテーマとして、10月9日～11日の3日間伊豆のIBM天城ホームステッドで開かれた。

国内からは、イメージ・プロセッシングに関連のある各分野から約40名の参加者があり、また、ミンガン大学からProf. R. R. Legault, IBMワトソン研究所から、C. K. Chow, 小林久, H. Schorrの各氏が参加した。

山内二郎, 森口繁一, 渡辺茂各氏の司会で進められた研究発表（9件）では、画像処理の手法、視覚系の情報処理モデル、入出力装置、予測符号化によるデータ圧縮、Remote Sensingと応用、三次元物体の認識、鉄鋼集における映像技術、X線写真の処理とそのシステム、染色体の解析などが論じられ活発な質疑が交された。

また、イメージ処理の実用化とその問題点についてのパネル討論に続いて、全員が二つのグループに分れ、それぞれ“seeds”と“needs”の立場からイメージ処理のあり方について自由討論を行ない、その結果を全員で再検討してプログラムを閉じた。

討論の内容は広い範囲にわたり、情報の識別、検索、医学、工業利用、五感とイメージ、人間との対比、ハードソフトの問題点をはじめ、漢字処理、海洋開発、公害、金相学、さらにはinterdisciplinary work（学際）へのイメージの導入にまで発展し、有意義な討論であった。

---



---

 本 会 記 事
 

---



---

**第12回大会報告**

去る46年12月2日（木）、3日（金）の両日、全共連ビルおよび日本都市センター（東京都千代田区平河町）の5会場で、第12回大会を開催した。大会プログラムは、すでに本誌Vol. 12, No. 11（11月号）に掲載されている。今回は、一般講演申込みは205件

にのぼり（前回184件）、参加者相は延べにして約3,000名であった。

なお、大会のおもな内容はつぎのとおりである。

**特別講演**

大型電子計算機 DIPS について 関口良雅（電電武蔵野通研）

**招待講演**

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. パターン情報処理について | 洲一博（電総研）   |
| 2. 情報処理用語の現状と将来 | 水野幸男（日本電気） |

## パネル討論会

1. 情報処理と人間社会の将来 司会 白根礼吉 (電電公社)  
石井威望 (東大), 祖父江孝男 (明大)  
坂井利之 (京大), 野田 克彦 (松下技研)
2. 企業内における情報処理教育 司会 一松 信 (京大)  
江村潤朗 (日本 IBM), 菊地 剛 (国際電電)  
穂坂有郎 (新日鉄), 柳井朗人 (電通)  
山中義昭 (富士通)

## 一般講演 (件数)

システム (22), グラフィックス (21), DIPS (5), DEMOS, 電話計算, 販売在庫 (13), CAD (5), 各種言語 (12), 数値解析 (17), 応用 (4), バンキングシステム (31), 理論 (10), プロセッサ (13), ハードウェア (8), パターン認識 (14), TSIR (6), システム性能評価とシミュレーション (10), ソフトウェア

(10), IR (4)

## Glushkov 教授の講演会

本学会の招きで, V. M. Glushkov 教授 (ソ連邦科学アカデミー, 人工知能研究所長) および Chernenko (人工知能研究所上級技師) の両氏が, 去る 11 月 29 日に来日し, 12 月 12 日まで滞在した。

Glushkov 教授は, 12 月 8 日に, 機械振興会館において, 「Algebra of algorithms and microprogrammed control computer design」と題し, 講演を行った。聴講者は約 20 名であった。

在庫がありますので, お頒けいたします。

- |              |                      |
|--------------|----------------------|
| ○第 12 回大会予稿集 | (定価 1,000円, 送料 200円) |
| ○電子計算機の国際標準化 | (定価 3,000円, 送料 200円) |
| ○コードの手引      | (定価 700円, 送料 共)      |

## 国際会議の案内

1972 年 3 月 15~17 日

**Zürich Integrated Systems for Speech Video & Data Communications Seminar**, Fed. Inst. of Tech., Zürich, Switzerland

1972 年 4 月 24~26 日

**Int'l Conference on Speech Communications and Processing**, Kresge Audit., MIT Campus, Cambridge, Mass.

1972 年 5 月 15~18 日

**Spring Joint Computer Conference**, Convention Ctr., Atlantic City, New Jersey

1972 年 6 月 6~9 日

**International Switching Symposium**, MIT, Cambridge, Mass.

1972 年 9 月 19~22 日

**Western Electronic Show & Convention (WESCON)**, L. A. Convention Ctr., Los Angeles, Calif.

1972 年 10 月 8~11 日

**Systems Man & Cybernetic Conference**, Shoreham Hotel, Washington, D. C.

1972 年 11 月 13~16 日

**Fall Joint Computer Conference**, Convention Ctr., Las Vegas, Nev.

## 昭和 46 年度役員

- 会 長 清野 武  
副 会 長 大泉充郎, 高田昇平  
常務理事 浦 昭二, 尾関雅則, 高橋 茂,  
高柳 晃  
理 事 池野信一, 猪瀬 博, 後藤英一, 坂井利之,  
之, 竹下 亨, 中原啓一, 美間敬之  
監 事 藤井 純

## 編 集 幹 事 会

- 担当常務理事 浦 昭二  
理 事 池野 信一  
幹 事 飯田善久, 石田晴久, 伊藤 朗, 遠藤 誠, 釜江尚彦, 亀田壽夫, 草鹿庸二郎, 樽松 明, 今野衛司, 近谷英昭, 渋谷多喜夫, 末包良太, 鈴木誠道, 高橋義造, 高山龍雄, 戸川隼人, 花田収悦, 林 達也, 淵 一博, 穂鷹良介, 真子ユリ子, 三浦大亮

## 「情報処理」寄稿案内

1. 寄稿手続 .....(2)
2. 原稿の種類 .....(2)
3. 原稿の体裁とその書き方 .....(2)
4. 執筆上の注意 .....(3)
5. 寄稿原稿の取扱い .....(4)
6. その他(付別刷価格表) .....(4)

昭和 47 年 1 月

社団法人 情報処理学会

## 「情報処理」寄稿案内

## 1. 寄稿手続

- (1) 寄稿者は原則として本会員に限る。寄稿者が2名以上の連名の場合には、そのうちの少なくとも1名は、本会員であることを必要とする。ただし、編集委員会において承認されたもの、または編集委員会が依頼したものは、このかぎりではない。
- (2) 本会所定の原稿用紙を使用のこと。原稿用紙は申込みがあり次第送付する(本会誌1ページは、本会原稿用紙で約6枚である。)
- (3) 原稿用紙の請求先・原稿の送付先および問合せ先はいずれも次のとおりである。

〒105 東京都港区芝公園 3-5-8

機械振興会館 314 号

(社) 情報処理学会

(電話) 東京(03)431-2808

## 2. 原稿の種類

- (1) 寄稿原稿 第1表参照  
(2) 依頼原稿 第2表参照

## 3. 原稿の体裁とその書き方

- [A] 論文は特別の場合を除き、標題、著者名、Abstract、本文、参考文献、付録、図および表の順序とし、それぞれ別紙に書くこと。
- (1) 標題 日英両文でできるだけ簡潔に、かつ一見してその内容がよく解るように決める。
- (2) 著者名 所属、氏名(英訳もそえる)のみを書く。所属は大学・学部・学科のように3項目で表記する。
- (3) Abstract 論文の要約を英文で150語以内にまとめて書く。著者の目的、理由、行なった事柄、結論などをそれによって内容が容易に理解できるようにすることが望ましい。

第1表 寄稿原稿

| 種別               | 制限ページ数(枚数*) | 内容                          | ** | 英文アブストラクト    |
|------------------|-------------|-----------------------------|----|--------------|
| (1) 論文           | 8ページ(48枚)   | 独創的な研究成果の記述                 | ○  | 150 words 程度 |
| (2) ショート・ノート     | 3ページ(18枚)   | 新しい研究成果の速報または小論文            | ○  | 150 words 以下 |
| (3) 資料           | 8ページ(48枚)   | 情報処理に関する資料として報告する価値のあるもの    | ○  | 150 words 以下 |
| (4) プログラムのページ*** | 3ページ(18枚)   | 新プログラムと処理結果または既掲載プログラムの使用経緯 | ○  | —            |
| (5) 談話室          | 2ページ(12枚)   | 経験談・提案・批判・誌上討論など            | ×  | —            |
| (6) 会員の声         | 0.5ページ(3枚)  | 本学会の活動に対する会員からの意見           | ×  | —            |

\* タイトルや図表、アブストラクトなどすべてを含めた原稿用紙の枚数(24字/行×13行/枚=312字/枚)

\*\* ○印は英文タイトルの必要なもの

\*\*\* 実際に通じたことのあるプログラムに限る。もしプログラムを書き換えたもの場合にはその程度を付記すること。初めに問題および解法の要旨を日本語で説明し、その次にプログラム言語で記述し、必要ならそのあとに、注(たとえば適用範囲、検算の程度など)をつける。プログラムおよび計算機によって得られたデータ等はそのまま写真製版することを原則とする。

(なお寄稿された原稿に対しては原稿料は支払わない)

第2表 依頼原稿

| 種別          | 制限ページ数(枚数) | 内容                       | 原稿料   |
|-------------|------------|--------------------------|---|
| (7) 巻頭言     | 1ページ(6枚)   | 本学会の会長や理事などの抱負など         | 会員の場合<br>¥1,000/ページ<br>非会員の場合<br>¥2,000/ページ |
| (8) 講演      | 6ページ(36枚)  | 本学会が主催した講演の要旨            |   |
| (9) 解説*     | 8ページ(48枚)  | 新しい技術の動向などについての一般的な解説    |   |
| (10) 講座*    | 8ページ(48枚)  | すでに定説となっている基礎的な問題についての解説 |   |
| (11) 報告*    | 8ページ(48枚)  | 国内外のプロジェクトや会議などの成果報告     |   |
| (12) 海外だより* | 2ページ(12枚)  | 在外者からの外国での研究状況などの報告      |   |
| (13) 座談会    | 8ページ(48枚)  | 編集委員会が企画した座談会の要約         |   |
| (14) 書評*    | 1ページ(6枚)   | 文献ニュース小委員会が選定した本の紹介      |   |
| (15) 文献紹介*  | 0.5ページ(3枚) | “ 海外文献の紹介                |   |
| (16) ニュース*  | 0.5ページ(3枚) | “ ニュース                   |   |

\* 印のものについては自発的な寄稿も歓迎する。ただし採否については編集委員会が個別に判断する。

- (4) 本文 まえがき、本論、むすびの順とする。  
まえがき まえがきに研究分野においてその論文が占める位置や歴史的背景を述べることを目的とする。したがって従来の研究との関係、研究の特徴などを明瞭に述べる必要がある。

本論 本論は不必要に長い記述を避け、要点を有効に伝えるように書くことが望ましい。図や表は、重複を避けていただきたい。また数式は主題の論旨の展開に必要な程度にとどめ、長い数式の誘導は巻末に付録として書く方がよい。結果を示す数式には文章による解釈を付記した方が読者に理解しやすい。

むすび 研究結果を検討し、研究目標に対してどこまで到達できたか、またはなし得なかったか、などについて簡単に記述する。なお謝辞もできるだけ簡単なものとする。特定事項についての援助は本文中でまたは脚注で記載した方がよい。

- (5) 付録 長い数式の誘導の過程や、実験装置、計算機についての説明などの詳細が必要な場合、これを本文中に挿入すると論旨が不明瞭になるので付録にする方が読みやすい。
- (6) 参考文献 研究内容に直接関係のある重要な文献には必ず言及すること。これら文献に関連のある本文中の箇所には、右肩に参考文献番号を書き、末尾にその文献をまとめて記述する。

参考文献は原則として、雑誌の場合は著者、標題、雑誌名、巻、号、ページ、年月を、単行本の場合には、著者、書名、ページ、発行所、発行年をこの順にする。

○山田太郎：“偏微分方程式の数値解法”，情報処理，Vol. 1, No. 1, pp. 6~10 (1960).

○J. Feldman & D. Gries：“Translator Writing Systems”，Comm. ACM, Vol. 11, No. 2, pp. 77~113 (1968).

○大山一夫：“電子計算機”，p. 300, 情報出版，東京 (1971).

○M. V. Wilkes：“Time Sharing Computer Systems”，p. 200, McDonald, New York (1968).

- [B] 論文以外の原稿の書き方については、上の(1), (2), (4), (5), (6) に準じて、読みやすい

内容のものにする。

#### 4. 執筆上の注意

- (1) 原稿第1ページには、寄稿の種類も書いておく。

- (2) 図(写真を含む)および表には、Fig. 1およびTable 1のように通し番号を付け、その図や表の内容が本文を参照しなくても理解できるような英文説明をつける。

図面は刷上り寸法の2~3倍大にきれいに書き、文字、記号などは明瞭に記入する。図面は本学会でトレースするから鉛筆書きでもよいが、トレースしにくい青焼きのままの図面は避けていただきたい。またフリーハンドを避け定規を使用すること。図中に記入する文字は、斜体・立体の区別をする。なお、線の太さに種類のある場合も指定をする。図面を入れる場所と希望する大きさ(下のA, B, C, Dのいずれか)は原稿用紙の欄外に明記すること。表はできる限り簡潔に表現し、長い表は途中を省略するか、あるいは、直接製版できる原稿にする。

図表のでき上り寸法と行数との換算は次の通りである。

| 寸法(mm)     | 行数(24字/行) | 原稿相当枚数 |
|------------|-----------|--------|
| A. 50×34   | 6行        | 0.5枚   |
| B. 67×50   | 12行       | 1枚     |
| C. 100×67  | 22行       | 2枚     |
| D. 134×100 | 44行       | 3.4枚   |

- (3) 文体はひらがなまじり国語文章体とし、当用漢字、新かなづかいを用いる。
- (4) 専門用語については、簡単な用語説明を添付することが望ましい。また本文中に使用する記号には必ず説明をつける。
- (5) 数字、ローマ字、ギリシャ文字、記号などは特に明瞭に記載する{大文字・小文字、上つき・下つきの別、×(かける)とX(エックス)の別など}。
- (6) 句読点は“.”および“,”を用い、それぞれ1画(1字分)を用いる。
- (7) 数式は特に印刷に便利よう注意し、ことに文中に式を挿入する場合には $a/d$ ,  $\exp(t/r)$ のような記法を用いる。
- (8) 独立した数式は、1行につき本文の2行ないし3行分のスペースを取って書く。数式も文

の一種であるから、原則として末尾に“,”  
または“.”を付す。

ただし、プログラム言語の形式を利用する  
場合には、この限りではない。

- (9) 印刷すべき本文以外の指定や注意書きなどは  
すべて朱書する。
- (10) 原稿中にあとから文章、文字などを挿入する  
時は、挿入する文章や文字を欄外に明瞭に  
しるし、かつ挿入する箇所を∨または∧（朱  
書）で示す。
- (11) 脚注は、\*、\*\*、\*\*\*などの記号で示し、本文  
中そのすぐ下に横線ではさんで記入し、脚注  
と朱書する。

文中の記号で太字を使用の場合は、その記  
号の下に——を朱書するか、その文字の上  
に朱書きで——によりゴチと指定する。ま  
たイタリック体使用の場合はその文字の下に  
朱書きで——と指定する。

#### 5. 寄稿原稿の取扱い

- (1) 学会において原稿を受付けたときは、当日の  
日付を原稿に付して処理簿に記入し、受付状  
を発送する。ただし原稿枚数が制限を越えて  
いる場合は、その旨のコメントをつけて著者  
に返送する。
- (2) 再受付の場合は“再”として前項に準ずる。
- (3) 掲載の場合には、これらの日付（原受付およ  
び最終受付のみ）を本文末尾に記入する。
- (4) 寄稿原稿は査読委員の審査結果に基づき、編  
集委員会でつぎのいずれかに決定する。
  - (a) ただちに採録する。
  - (b) 照会によって著者に軽微な修正などを求め  
た上、採録する。
  - (c) 著者に照会して回答または修正などを求め  
た上、あらかじめ審査を行ない採否を決定  
する。
  - (d) 寄稿の種類を変更した方が適当と判定され  
た場合、著者にその旨照会し、回答または

修正を求めた上で再審査する。

- (e) 照会を行なっても、本会誌に掲載するにふ  
さわしい程度に改良の見込みがないと判定  
された場合は不採録とする。
- (5) 照会は論旨不明の点の是正、明らかな誤りの  
訂正、難解もしくは冗長な記述の書きかえな  
どを求めることに主眼をおいて行なわれる。
- (6) 不採録に決定した原稿は、不採録とした理由  
を付して著者に返却する。
- (7) 掲載された原稿の著作権は著者に属する。
- (8) 掲載された論文等については特許法第30条第  
1項（実用新案法第9条第1項において準用  
する場合を含む）の適用を受ける。

#### 6. そ の 他

- (1) コピー 郵送中の紛失事故対策や照会などの  
便宜のため、原稿のコピーは必ず手元にとっ  
ておいていただきたい。
- (2) 校正 著者に校正刷りを送り、誤植の防止に  
は万全を期しているが、校正のさいに、原  
稿、特に原図面を訂正することは禁止する。
- (3) 正誤 著者から正誤の申し出があった場合、  
正誤表を最近号に掲載する。
- (4) 別刷 別刷はページ数および必要部数に応じ  
て別表\*の定価が定められている。したがっ  
て必要な場合には著者は校正の時に、必要部  
数を明記して注文することができる。

ただし、あとからの注文に対してはこの表  
より高価になるのでご注意ください。

\* 別刷価格表（表紙不要の場合は、2,700円差引き  
になる）

| 部数 \ PP | 1~4   | 5~6   | 7~8   | 9~10  | 11~12  |
|---------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 100     | 4,200 | 4,800 | 5,100 | 5,700 | 6,000  |
| 200     | 4,800 | 5,400 | 6,000 | 6,900 | 7,200  |
| 300     | 5,400 | 6,300 | 6,600 | 7,800 | 8,100  |
| 400     | 6,000 | 7,200 | 7,500 | 8,700 | 9,300  |
| 500     | 6,600 | 7,800 | 8,400 | 9,900 | 10,500 |